

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 共同生活と身体感覚 (私のスケッチ・ブック (13))

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00005896">http://hdl.handle.net/10502/00005896</a>

## 共同生活と身体感覚

国立民族学博物館 教授

森 明子

### ■洗濯室にて

もう15年も前のことになるが、私のヨーロッパ体験はウィーンの学生寮から始まった。寮といっても夏季にはホテルとして利用される、きわめて近代的な施設だった。1人または2人でひとつの部屋を利用することになっていて、6部屋の住人がひとつのキッチンを共有した。洗濯は、地階の洗濯室に洗濯機と乾燥機がそれぞれ5~10台ほど並んでいて、コインランドリーと同様の有料システムであった。これを寮に住む全員と、プラスアルファが利用した。プラスアルファというのは、その料金が外のコインランドリーより安かったから、周辺に住む学生や、学生寮で掃除や営繕のために雇われていたアルジェリア人家族なども利用していたからである。洗濯機はいつも稼働していて、たいていは待つことになったから、そのあいだに私はさまざまな発見をした。

大きなスポーツバッグの他に、大形紙袋を2~3個も下げてくる学生がいて、中にはぎっしりと衣類が詰め込まれている。彼はいったいどんな生活をしているのだろうか。

男子学生が洗濯機から取り出した洗い物の中には、女性の下着がまじっていることもあった。ときにはおどけた男子学

生が、自分のジーンズの上にそれを当てて見せ、そこにいる数人の笑いをさそった。私のほうがどぎまぎしたが、同時に、学生たちにとって、女の子のパンティを洗うことも、洗ってもらうことも、まるで屈託がないのだと感心した。

大量の洗濯物を持ってくる学生は、決して少数ではなかった。しかもその洗濯物は、複数の、多くは4人以上のものだということが、しだいにわかってきた。学生の多くは共同生活をしていて、その中の洗濯当番が、代表して全員の洗濯物を洗濯していたのである。

### ■共同生活

学生の共同生活というのは、2~6人程度が集合住宅の1室を借りて生活することが多い。このような共同生活が実現するには、さまざまな要因がある。



ヨーロッパの古い都市（大学はだいたいそういう都市にある）には、現代人の生活スタイルに合っているとはいいがたい、古い集合住宅が数多くある。古い住宅は大きくて部屋数も多く、雰囲気もよいが、天井が高くて光熱費はかかるし、家賃も安くはない。小人数の現代家族のニーズには合わないが、数人の学生が家賃を折半すれば、快適に住むことも可能だ。その場合、個室の数だけの学生が共同生活し、キッチンとバス、トイレなどを共有するのがふつうである。学生に恋人ができれば、そこに加わる。

ヨーロッパでは、学生の共同生活は、ひとつの生活形態として認められていて、親と同じ都市に住んでいても、友人たちと共同生活を始める学生は少なくない。若者が友人と共同生活を始めることは、生活をいかに設計するかという始まりのレベルより、親から独立する、という積極的な意味が認められている。

ホーゲンマインシャフト

## ■居住共同体の成立

他人が共に生活するという意味では、徒弟制度や寄宿人などを含めて、共同の生活のさまざまなあり方が、近代以前からあった。しかし、ひとつの生活形態と

して理解される共同生活のあり方は、近代の中から、近代への批判として生まれてきた。

学生のあいだに多く見る共同生活の形態は、居住共同体（Wohngemeinschaft）と呼ばれるもので、1960年代後半の学生運動の時代に、その起源を求めることができる。背景には、中産階級の家父長的小家族への批判、高等教育の普及、大学都市における住宅不足などの諸要因の結びつきがあった。

当初の居住共同体は、家父長的な小家族や家族の分裂を、集団的な連帯という生活方式をもって克服しようとする思想のもとに成立した。この共同生活には、個人ばかりでなく子供のあるカップルも含まれていて、子供を共同的な人間関係のもとで養育することが重視された。

しかし、政治的な意味合いは時がたつにつれて薄れていった。居住共同体は、1970年代、80年代には、社会的な居住のあり方として認められていった。90年代以降の現代では、住宅供給の増加という状況にも影響されて、居住共同体という生活形態は減少しつつあり、社会的な位置づけとしては、ひとつの通過段階と見なされる傾向が強くなっている。

一方で、それがひとつの生活スタイルとして社会的に承認されていることは、現在もかわりがない。

知人のドイツ人男性は50歳代であるが、女性を含んだ居住共同体の生活がすでに20年以上になる。彼の女性同居人には恋人がいて、その恋人は、別の居住共同体で生活している。その居住共同体にも、女性の同居人が含まれている。



異なる職業をもつ居住共同体の同居人たちは、ときどき訪れる恋人も含めて、夜のひとときや日曜日の午前中に、互いの考えを交換しあう会話をたいせつにする。仕事などで興味深い経験をしたことや、新聞記事や読書、映画などが話題になることが多い。彼らは、互いの所在についてはいつもほぼ把握しているが、拘束することはなく、別行動をとることが多い。日本人に説明しても、この生活スタイルは理解してもらえない、というのが知人の言である。

居住共同体は、現代社会のさまざまな要請に適合する生活スタイルを提供しつつあることにも言及しておこう。女性や老人、障害者や長期リハビリ治療の患者、また、ホームレスの人々の居住共同体が実現していて、新しい社会住宅の方向を示している。制度が一方的にサービスを与えるのではなく、居住共同体では、同居人のそれぞれが平等な関係を前提として、それぞれに合った自立性を確保し、責任を負って共同生活を遂行していく。そこに新しい可能性が開けている。

## ■身体感覚の構成

さて、このような他人との共同生活が実現されるとき、人はかならず何度か身体的な違和感を体験する。たとえば、友人と数日の旅行をしても、歯磨き、下着や靴下の替え、入浴やトイレの用などをめぐるわずかな習慣の違いを、違和感として感じることもある。

これは、身体のレベルで、自己と他者との境界を感じとっている感覚といえる。このような身体的な感覚は、長い時間を



かけて、たいていは家族の中で、意識下にはぐくまれる。そして他者と出会ったときに、自分が育んできた身体性を初めて認識することになる。共同生活は、そのような身体性のぶつかりあいを必然的にもたらすものであり、しかも、日常的な生活の中で否応なくそれと対面することを強いる。

このぶつかりあいは、なかなかエネルギーのいることであるから、共同生活にはそれ相応の覚悟が必要になる。ドイツで居住共同体という生活スタイルが確立していった過程に、第二次世界大戦後の経済的、社会的な条件、政治思想が介在していたことは、それが共同生活を実現するためのエネルギーとなっていたと理解することができる。

身体感覚を共有する家族の領域は、通常「私的領域」と呼ばれる。ミシェル・フーコーが論じたように、身体性を私的領域の中に閉じ込めて、私秘化していったのはヨーロッパ近代のプロジェクトであった。この私秘化の核を構成し、その境界を固い殻で守っているのが「近代家族」である。

居住共同体は、この私的領域としての家族を再編成し、身体感覚を、家族以外

の友人関係の間にも解放しようとする実験であった、といえるだろう。

## ■共同性と身体感覚

ここまで考えてきたところで、冒頭に述べた洗濯をする男子学生の姿を思い出してみたい。ここで洗濯は、少なくとも二つの視点から問われる。ひとつは洗濯を家事労働ととらえる視点。この場合、この男子学生の行動は、家事労働を分担する男性として読みとれる。それは、家事労働を女性のものとする家父長的な分業に対する批判として、理解することができる。男性が家事に参加することは、まことに結構なことである。しかし、そのような思想に回収しきれない身体感覚がまだ残るのではないだろうか。それがふたつめの視点であり、問いである。

女性（あるいは男性）の衣類を、男性（あるいは女性）が洗うことは、はたして幸せなのだろうか？ あるいは同性である友人の場合であっても、その衣類の洗濯と一緒にするのは幸せなことなのだろうか？ その場合、友人とは、どのような関係の人なのだろうか？

この問いは、換言すれば、共同性と身体感覚への問いである。この問いに対面

するためには、ひとまず家族に立ち戻って考えるほかない。家族の<sup>あつち</sup>ところは、「家族」という言葉を使えば、私たちは身体性をめぐるあいまいな感覚を、たいてい封じ込めてしまうことができることである。

たとえば、結婚した日から、それまで他人であった配偶者の家族と、洗濯を含むさまざまな身体的な接触を開始する。そのようなことが求められ、多くの場合は、できてしまう。これは「家族」という概念が強力に作用することによって、身体のレベルでたしかに存在する違和感が、おさえつけられるからである。その違和感は、やがて時間とともに、「慣れ」の中にまぎれ、意識の下に沈んでいく。

私がウィーンやドイツで見た居住共同体という共同生活のスタイルは、このような身体感覚を、家族の外に広げるといって再編成をなしとげた事例であった。それも1970年代に、近代批判としてやってのけたわけである。

同じような運動を展開しながら、それをなさなかった日本は、近代批判をするにはなお未熟であったといえるのかもしれない。あるいは、ヨーロッパ世界とは別の身体感覚が存在している、と考えるべきだろうか。この点については、もう少し考える必要があるようだ。

## □参考文献

- 1) Flagge, Ingeborg (hg.) : Geschichte des Wohnens: von 1945 bis heute, Aufbau-Neubau-Umbau, 1999 Wustenrot Stiftung, Stuttgart.
- 2) フーコー、ミシェル：『性の歴史Ⅰ 知への意思』新潮社、1986

